「私」を巡る問いの発見

── ヨーゼフ・ツォーデラーの小説『手を洗うときの幸福』──

今　井　　敦

序

1935年に南チロルのメラーンに生まれたヨーゼフ・ツォーデラーは，南チロルの代表的作家と見なされている。とはいえ，彼が地域を代表すると言えるのは，彼のテクストが郷土を描いているからではなく，世界のあらゆるところで見られる人間的問題を，質の高いオリジナルな言語表現によって抉り出し，地域を越えた広い範囲で評価されているからである。

なるほど彼の文学においてはしばしば南チロルが舞台となり，そこで起こった様々な出来事が背景をなしてはいる。が，そうした材料を用いて描き出されるのは，文化の狭間に立たされ，自らのアイデンティティを求めて苦悩する人間の姿であり，この中心的テーマが，故郷の喪失，言語的不安，歴史への執着，疎外感といったモティーフを使って様々なヴァリエーションで繰り返される。[1] また，ツォーデラーの言語表現はユニークな視覚的比喩に富んでおり，タブーを破ることを厭わず，人物は生き生きとした造形性を獲得している。[2] つまり彼のテクストは，他の言語に囲まれた少数ドイツ語母語話者による文学，という希少価値的枠組みを越えた，言語芸術としての質と内容を備えているのであり，それゆえにこそ広範に受容され評価されているのであろう。[3]

本稿は科学研究費補助金「基盤研究(C)」(課題番号17520182) の研究成果の一つである。小説『手を洗うときの幸福』からの引用は下記の Taschenbuch 版による。引用右の括弧内の数字はこの版のページ数を示す。Joseph Zoderer: *Das Glück beim Händewaschen.* Roman, Fischer Taschenbuch Verlag, Frankfurt a.M. 1997 (Neuausgabe).

1）これに関しては次の二つの拙論において，長編小説『慣れることの苦しみ』を中心にして詳しく述べた。

今井敦「ヨーゼフ・ツォーデラーと南チロル ── 多言語・多文化社会を描く文学 ──」(「世界文学」第98号，世界文学会2003年，76-85ページ) 参照。

Vgl. Atsushi Imai: *Joseph Zoderer und Südtirol. Versuch über Zoderers Roman „Der Schmerz der Gewöhnung“.* Mitteilungen aus dem Brenner-Archiv, Nr.22, Innsbruck 2004, S.89-101.

2）ヨーゼフ・ツォーデラーの言語的，文体的特徴について論じるのは興味深いことではあるが，本論のテーマから外れるので詳しくは述べない。

3）ツォーデラーの批評界における受容に関しては次の本に詳しい。Vgl. Ruth Esterhammer: *Joseph Zoderer im Spiegel der Literaturkritik,* Innsbrucker Studien zur Alltagsrezeption Band 2, Wien/Berlin (Lit) 2006.

1976年にミュンヒェンのレリーフ書店から刊行された小説『手を洗うときの幸福』(*Das Glück beim Händewaschen*) は，ツォーデラーが本の形で出版した最初の散文作品である。この小説は物語作家としてのツォーデラーの出世作であり，また，当時の南チロルのドイツ語文学にとって転機を示すものともなった。[4]

この小説に見られる自伝的傾向はツォーデラー文学の特質の一つであり，アイデンティティの不安に苛まれた主人公が自らの帰属性を探るため過去と故郷を旅する，という内容においても，主人公の想念のみを，主人公自身の視点から頭に浮かんだままに語るという手法や，汚いもの，ゾッとさせるものを連想させる比喩表現においても，のちの小説群を先取りしている。その意味でこれは「処女作」と呼ぶにふさわしいものであり，次の小説『イタリア女』(*Die Walsche*, 1982)とともに，物語作家としてのヨーゼフ・ツォーデラーを確立したものと思われる。[5]

それにもかかわらずこの小説は，『イタリア女』の陰に隠れてしまい，正当に評価されているとは言い難い。インゲボルク・バッハマン・コンクールで高く評価され，出版と同時にドイツ語圏の広い範囲で注目を浴びた『イタリア女』は，イタリアでもいわゆる「ベストセラー」となった。[6] この小説は，ドイツ語住民とイタリア人社会の軋轢という南チロル特有の問題を題材としているのだが，こうした時事的問題に読者の関心が集まったことは，この小説を文学として評価する際の妨げになったばかりでなく，前作『手を洗うときの幸福』をも，同じ視野の中に置いてしまうことになった。

4）例えば南チロルのジャーナリスト，ゲルハルト・ムーメルターはこの本を評して，「文学的事件であり，また，南チロルの文学にとって一種の転換点であろう」(Gerhard Mumelter: *Ereignis und Wendepunkt für Südtirols Literatur. Zu Zoderers neuem Roman.* In: Alto Adige, 20.10.1976) と述べている。どのような意味で転換点なのかは，当時の様々な書評を読むと明らかになる。それまでの南チロルの文学は，詩や短い物語が主体で，自然，故郷，民族，愛，家族，友情といったものを讃えるだけのいわゆる「郷土文学 (Heimatliteratur)」であった。文学的要求度の高い本格小説やドラマはほとんどなく，ボーツェン県当局の保守的画一的文化政策もあって，新しい価値の創造といえるものは現れなかった。それゆえ，言語の存亡すら危うい南チロルのような地域ではドイツ語で創作するだけで意味がある，と考えるいわゆる Minderheitenliteratur の観点でしか，南チロルの文学を評価することはできなかったのである。そうした中で，ツォーデラーの『手を洗うときの幸福』は，彼の最初の詩集同様，その文学的質と批判精神によってセンセーションを巻き起こした。60年代末以降の南チロルの文学については，次の拙論および下記を参照されたい。

今井敦「南チロルの現代ドイツ語文学」(「九州工業大学研究報告（人文・社会科学）」第56号 2008年，25－33ページ）参照。

Vgl. Siegrun Wildner: *(W)orte. Words in Place. Zeitgenössische Literatur aus und über Südtirol. Contemporary Literature by German-Speaking Minority Writers from South Tyrol (Italy)*, Innsbruck/Bozen/Wien (Skarabaeus) 2005, S.13-67.

5）『手を洗うときの幸福』の前にツォーデラーは二つの長編小説と多くの短編作品を書いていたが，本として出版するには至らなかった。それゆえ，『手を洗うときの幸福』が最初に刊行された長編小説となったのである。

6）『イタリア女』のイタリアにおける受容に関しては，次の文献に詳しい。Vgl. Luigi Reitanni: *„Lontano". Der „Italienkomplex" in der deutschsprachigen Literatur aus Südtirol.* In: Johann Holzner (Hrsg.): *Literatur in Südtirol.* Innsbruck/Wien (Studien) 1997, S.54-76.

それゆえ，『手を洗うときの幸福』を，いわゆる「南チロル小説」[7] 以外の視点から読み解こうとする本格的取り組みはなされてこなかった。新聞や雑誌に掲載された書評は少なくないが，それらはあくまでジャーナリスティックな印象批評であり，詳しい分析に基づいたものではない。

本稿では，ツォーデラーの出発点となったこの小説を，青年の内的成長を描いた一つの発展小説として捉え，よそ者感覚，言語的劣等感，歴史的負い目というネガティヴな感情ゆえに自己否定へと向かっていた主人公の心が，疑問，批判，反抗，恋愛，世界欲を通じて自我意識へと成長していく過程を辿ってみることにする。これにより，処女作であるこの小説が，「私」を巡る問いという，その後のツォーデラー文学の中心テーマに正面から向き合ったものであり，社会的・心理的アイデンティティの構築という，現代に生きる青年に普遍的な問題を浮き彫りにしたものであることを明らかにしたい。

自伝的語り

インスブルック大学ブレンナー・アルヒーフには，『手を洗うときの幸福』のタイプ原稿が保管されており，原稿の日付から，この小説が主に1975年夏に執筆されたものであることが分かる。当時ツォーデラーはイタリア国営放送 RAI のボーツェン支局で記者として働いていた。一年前，39歳のときに最初の詩集をミュンヒェンのレリーフ書店から出したばかりだった。75年に2冊目の詩集を，そして翌年には『手を洗うときの幸福』を同じ出版社から刊行することになる。6年後，この小説はカール・ハンザー書店により改めて上梓され，さらに2年後にはフィッシャー・タッシェンブーフの一冊となって今日に至っている。イタリア語訳は，イタリア最大の出版社モンダドーリから1987年に刊行，2005年にはこれもペーパーバックとなった。この小説はまた，ヴェルナー・マステン監督によって1982年に映画化され，西ドイツ，イタリア，オーストリア，スイスでテレビ放送されている。[8]

主人公は，アンドレアス・ヒッタラーという名の十代初めの若者であるが，語り手自身がこの主人公であるため，常に一人称で語られる。物語は，南チロルからの移住者の子である彼が，少年時代をグラーツで過ごしたあと，第二次大戦後まもなくスイスとの国境を越え，ヘールブルック近くにあるイエズス会系寄宿学校に入るところから始まり，不適格者として放校処分にされるところで終る。その間の寄宿生活や休暇中の体験が語

7）『手を洗うときの幸福』以後のツォーデラーの一連の小説を，南チロルをテーマにした「南チロル小説 Südtirolroman」として読む読み方は，ツォーデラー自身の否定にもかかわらず繰り返し行われている。Vgl. Ruth Esterhammer: *Joseph Zoderer im Spiegel der Literaturkritik*, a.a.O., S.25ff. 筆者も注1に挙げた拙論の中でこの立場を取ったが，その際筆者は，南チロルという多文化社会に典型的な形で現れた，普遍的・人間的問題を扱ったものとして『慣れることの苦しみ』を論じたのであって，南チロルを描くことそれ自体がツォーデラーの目的だと述べたわけではない。

8）*Das Glück beim Händewaschen*, Regie: Werner Masten, Gemeinschaftsproduktion von ZDF, ORF, SRG und RAI 1982.

られるという点では，時間的経過に沿った語りとなっているが，幼・少年期の断片的回想，父母，祖父母の過去などが，記憶に浮かぶままフラッシュバックの形であちこちに挿入されている。語り手のいる時間を現在とすれば，寄宿学校時代という過去を語りながら，随時，さらに過去のことが順不同で挿入されるという三重構造になっている。

「私」が自らの過去，人生を振り返るという語り方は，自伝のそれと同じである。しかしこの小説が「自伝的」と評されるのはむしろ，作中に描かれた人物や出来事が作家自身の体験に取材しているためである。作者ツォーデラーは，1940年，4歳のとき，家族とともにメラーンを去りグラーツに移住した。空襲の中で少年期を過ごしたあと，戦後，12歳のときにスイスのヴィドナウにあるイエズス会系寄宿学校に入り，16歳で退学している。こうした経歴が小説の主人公と重なるばかりでなく，作中の登場人物，例えば主人公の兄ハンス，母アンナ，姉アンナ，妹グレーティ，そして飼い犬ネリーまでが同名で実在している。加えて，ツォーデラーがのちに発表した小説『ロンターノ』(*Lontano,* 1984) や『慣れることの苦しみ』(*Der Schmerz der Gewöhnung,* 2002)，『メラーンの空』(*Der Himmel über Meran,* 2005)などにも，同じ人物，同様のエピソードが出てくることから，この小説のかなりの部分が作者の人生を下敷きにしていることが分かる。

自伝として読まれた場合，描かれた内容がいかに事実に即しているかという点に読者の関心が向きがちであるが，あるインタヴューの中でツォーデラーは，この小説が自伝として読まれることを拒否し，「他のすべての作家と同様，自分の人生をただ材料として使っているだけだ」，[9] と述べている。しかし別のところではまた，次のようにも主張している。

> 私は，自らの現実を見つけることの方が，何かを創作することよりもずっと難しいと思います。私に感銘を与えてくれる作家，私の心を捉える作家に私が期待するのは，直截さです。この直截さを感じさせ，それによって私自身をも直截にしてくれる作家，逆に言えば，そうした作家しか私は読みません。すなわち，この作家は何を体験したのだろう，何に悩んだのだろう，彼は幸せだったか，彼に幸せはあったのか，どうやって自分の存在に折り合いをつけたのか，彼は何を疑問に思ったか，そういったことを私は知りたいのです。[10]

すなわちツォーデラーにとって本質的なのは，事実関係ではなくて，そうした材料を通して描き出された内的葛藤ということになるであろう。

---

9) Ruth Esterhammer: *Joseph Zoderer im Spiegel der Literaturkritik*, a.a.O., S.26.

10) Armin Gatterer: *„Sehen, wie wenn alles verhext wäre". Joseph Zoderer im Gespräch*. In: distel. Zeitschrift für Kultur und aktuelle Fragen, Nr. 4-5/1982.

故郷の喪失と自己否定

主人公「私」は，寄宿学校に入学後，よそ者としての意識を強くする。彼がそれを感じるのは，校内でただ一人の外国人であるという事実，周囲とは違ったドイツ語，すなわち，「馬鹿馬鹿しい書き言葉」(11)で話すという自覚，そして自分がどこの国に属すのか，自分でも分からないという不確かさから来ている。学校に来て間もないころ自分に向けられた問い，「君はオーストリア人かい？」(11)という問いを，彼は忘れることができない。戦後まもなくグラーツからやって来た彼が持つのは，未成年者用の国籍記載のない旅券である。10年近く前にオーストリアは消滅し，ドイツ敗北のあとオストマルクがどうなるのか，まだ定かではなかった。

級友たちはことあるごとに主人公をスイスの歴史に対峙させる。オーストリアの代官ゲスラーと対決したヴィルヘルム・テル，スイスがハプスブルクの軍勢を打ち負かしたモーアガルテンとゼンパハの戦い，英雄ヴィッケルリート，スイス衛兵の犠牲死，永世中立国。繰り返し自慢気に語られるこれらの名前や出来事は，「歴史による私の敗北」(12)として，「私」を苦しめる。主人公は，「自分がまったくもって孤独な少数派」(11)であると自覚せざるを得ない。

> 私はオーストリア人であってスイス人ではなかった。そしてこの点にこそ逃れようのない悲劇があった。というのも私は，もう一度生まれ変ることはできなかったから。より人間らしくなるために今度はスイスに生まれることはできなかった。〔中略〕
>
> 私は自分の素性を否定し始めた。それについては何も言わないか，すべてをうまく言い繕う嘘をついた。恥ずかしかった。何も差し出せるものがなかったから。人に見せられるどんな価値も私は持ち合わせていなかったのだ。(12-13)

自らの由来を否定するだけでなく，自分自身を小さくすることを主人公は学んでいく。自己否定は，イエズス会神父たちによって運営される厳格な寄宿学校が求めるものでもある。校内での「最高最上の掟は，従順」(28)であり，問われぬ限り沈黙を守ることが求められた。自負心は厭うべき罪だった。「権力は目に見えぬほど大き」く，「従順とは献身」であって，「誰も服従とは言わなかった」。(28)

自負心を砕こうとする学校の教育は，自分が誰なのか，どこから来たのかを知らない主人公にとって，権力の「優しさ」，「寛大さ」として感じられる。彼は，「手を洗うとき」，すなわち自負心を懺悔して罪を洗い清めるときに幸せを感じ，ラテン語の語彙を暗記する際の，頭が麻痺した状態を楽しむようになる。それは「私」を否定する幸せである。罪に対する感受性を洗練し，良心の呵責を最大限に感じるため彼は，最も厳格な神父を選んで懺悔する。

ところが皮肉にも，罪の意識が高められるにつれ彼には，神が悪魔と同じほど恐ろしいものに思われて，神を避けるようになっていく。「両者への私の恐れは大きかった。

ただ，悪魔に対しては神に守られていると信じることができたが，神に対してはまるで防御の術を知らなかった」。(50)彼が神を恐れるのは，「私」を否定し抑え込もうとはしても，結局それを否定しきれない自分を意識し，後ろめたく感じるからである。

語り手は，時間的距離を置いた批判的視点からこの自己否定の時代を振り返り，当時の自分を，「袋に詰められ水に沈められた猫のような存在」(44)と呼んでいる。「手を洗う」こと，つまり，自己を否定することによって主人公が感じた幸せは，のちの彼，すなわち語り手の視点から見た場合，権力への闇雲な服従に過ぎなかったのである。「規則の家」の名で呼ばれる寄宿学校は，主人公にのしかかる閉鎖的権威として，一切の疑問や批判を受け付けない絶対的機関として表れる。外界から隔てられたこの寄宿学校の中で「私」を押し殺しながらも，主人公の内側では，由来への問いが次第に抑え難いものになっていく。

言語とアイデンティティ

空襲の中で過ごしたグラーツ時代の回想は，主人公の少年期が決して悲惨なものではなかったことを物語っている。むしろそれは，戦争や逃亡にもかかわらず冒険に満ちた楽しい思い出として語られる。少年時代の彼は，両親が町の人々とは別の言葉，すなわち南チロル方言を話していることを気に留めなかった。語り手は，「グラーツで私は，自分が南チロル人であることに一度も悩まなかった」(47)と述べている。そしてそれを根拠づけるかのように，「私はほかのみんなと同じ言葉で話した」(47)，と続ける。まるで，同じ言葉（ここではグラーツ方言）を使うことが，屈託ない少年時代の保証でもあるかのようである。出身地メラーンについて彼は，わずかに淡い記憶を持つのみであった。

だが主人公は，まもなくメラーンでの幼年期や両親の過去，一家の由来について考えるようになる。そのきっかけとなるのが，両親からの手紙である。両親の望みが叶い，一家は突然イタリア人となったのである。父も母も，南チロルへ帰る日をずっと待ち望んでいた。南チロル人の国籍選択に関する1939年の協定，いわゆる「ヒットラー＝ムッソリーニ協定」が見直され，ドイツへ移住した人々の，イタリア国籍取得と帰郷が認められたのである。[11]

---

11) ヒトラー＝ムッソリーニ協定は1939年にドイツとイタリアの間で結ばれた。この協定によって南チロルに住むドイツ語住民は，ドイツ国籍かイタリア国籍を選ぶよう定められた。ドイツを選んだ者は当時のドイツ領内へ移住しなければならなかった。86%の南チロル人がドイツ国籍を選び，そのうち約7万5千人が南チロルを去った。移住は1943年，ドイツ軍のイタリア侵攻によって中断された。戦後，オーストリア＝イタリア間で結ばれた南チロルに関する協定（グルーバー＝デガスペリ協定）の中で，ドイツ国籍を選んだ人々の国籍問題の見直しが約束された（1946年）。2年後には彼らのイタリア国籍取得が認められている。南チロルにおける国籍選択（Die Option）に関しては，次の二つの文献に詳しい。Vgl. Reinhold Messner (Hrsg.): *Die Option. 1939 stimmten 86% der Südtiroler für das Aufgeben ihrer Heimat. Warum? Ein Lehrstück in Zeitgeschichte,* Aktualisierte Neuausgabe, München/Zürich (Piper) 1995; Rolf Steininger: *Südtirol im 20. Jahrhundert. Vom Leben und Überleben einer Minderheit,* Innsbruck/Wien (Studien) 1997.

主人公は，はっきりした国籍を得たことを誇りに思う一方で，「冒険的」な，「まやかしのように思える状態」(61)が，自分に「押し付けられた」(62)とも感じる。勉強の合間に「故郷についての問い」(62)が彼を煩わすようになる。

クラスメートの前ではイタリア人であることを自慢気に話しながらも，自分がイタリア人であることを受け入れることができない。それでも，南チロルに住む伯父から手紙が届くと，「つまりあの地は実在するのだな」(62)と納得する。「初めて私にも自分の目的地，自分の人々，そして自分の故郷ができたのだ」(62)と思う。

しかし主人公の帰属意識は，「故郷」そのものによって再度揺るがされることになる。伯父の家で休暇を過ごすため，彼は初めて南チロルを訪れる。スイス東部からイタリアに，つまり南チロルに入る国境を前にして，旅券の提示を求められたときである。

> そして初めてのことだった。イタリアの旅券を持っていた私は，イタリア語で話しかけられた。私はなす術(すべ)なくにやけ笑いを浮かべ，歯を見せた。私がドイツ語で言ったこともお笑いぐさで，しかも吃(ども)っていた。うしろめたかった。頷いて「はい」と答えた。できることなら，（校庭の）石膏像の前に出たときのように直立不動でいたかった。新しい旅券はすべてを偽りにした。だが旅券に問題はなかった。この旅券ゆえに私が吃ったことは，何でもなかったのだ。私はイタリアに入ることが許された，そこに属しているわけではなかったけれど。私は，オーストリア人でもなく，スイス人でもなく，ましてイタリア人では到底ありえなかった。(64)

こうして主人公の自己認識は言語によって揺るがされる。イタリア語を理解できない彼にとって，正当な国籍を持つだけでは帰属性の証明にならない。むしろ自分を怪しげな存在と感じるばかりである。[12] そして動揺し，過度に高ぶった自意識は，逆に吃(ども)りという形で彼の言語に跳ね返る。南チロルは，彼の目には「まったくよそよそしい土地」(64)としか映らない。伯父からは知り合いに「スイス人」と言って紹介され，休暇が終ると，「まるでそこに属してはいけないかのように，国境を越えて戻って」(72)行く。

「私」を巡る問い

短期間の南チロル滞在は，主人公のうちに抑え込まれていた「私」についての問いを刺激することになる。「なぜ私はここにいるのか？ 私がどこかにいるとはどういうことか？ そもそも私はなぜ存在しているのか？」[13] ツォーデラーの文学は常にこの問いを

---

12) ツォーデラー文学の主人公たちがいずれも自分を「怪しげな存在（suspekt sein)」と感じ彷徨する人びとであることを，Luigi Reitani は指摘している。Vgl. Luigi Reitani: *„Lontano". Der „Italienkomplex" in der deutschsprachigen Literatur aus Südtirol*, a.a.O. S.64.

13) Joseph Zoderer: *À propos Heimat.* In: Johann Holzner (Hrsg.): *Literatur in Südtirol*, a.a.O., S.13-19, hier S.13. Vgl. auch ders.: *Der Himmel über Meran*. Erzählungen. München/Wien (Hanser) 2005, S.138.

巡って営まれており，寄宿学校に戻った主人公が，何にせよ問いを口にするようになるのは，「私」を巡る根源的問いが主人公のうちに芽生えたことの証しである。完全なる沈黙が要求される寄宿学校で，主人公は見たもの，考えたことを言葉にし，そして問う。しかし，「自負心」から来るとされるこうした問いは，ここでは忌むべきものであり，堕落と解釈される。(76)

こうしてこの小説は，芽生え，形成されていく自我と，「自己磔刑」(94) を求める抑圧的システムのあいだで展開された青年期の内的葛藤の観を呈する。懺悔によって，また規則への服従によって「私」を殺そうと努めながら，主人公は由来についての問いを突き詰めるようになっていく。そしてブレンナーの向こう側，南チロルへの，彼以外の家族の再移住の日がやって来る。彼自身はその年の夏休みに，初めてメラーンの家族のもとへ「帰る」ことになるのである。

メラーンの町を見下ろす風光明媚な山腹の集落に暮らしながら，主人公は，父や兄の口から，なぜ彼らが南チロルを去らねばならなかったかを聞く。父は，第一次大戦中オーストリア兵としてイタリア軍と戦った。だが，そのイタリアが休戦協定締結後に南チロルを占領したことに，憤懣やる方なかった。教師インナーホーファーがファシストに殺された事件[14] のあと，彼はイタリア人襲撃の仲間に加わる。ファシズム政権下では職を失い，子供の手を引いて農家を物乞いして回った。道路工事の仕事を得るため，やむなくファシスト党に加わった。

> 南チロル全体で国籍選択が行われたとき，多くの人と同様父の兄弟の何人かも苗字を変えた。村や通りの名前がイタリア語に変わったように，彼らはイタリア姓に変えたのだ。父は変えなかった。ごく上品ななりをした何人もの紳士がそこら中に現れて，「南チロル人なら故郷を裏切ったりはするな。我々の故郷とはドイツ語なのだ」，と説いていた。
>
> 「国籍選択，ありゃ気が変になるかと思った」，父は言った。イタリアかドイツか，ドイツ語を取るかイタリア語を取るか。〔中略〕
>
> 「財産がある連中は，せいぜい口を開けて叫んだだけさ。」父は言った。「だが農地も何も持たねぇ人間は，出て行かなけりゃ，移住しなけりゃならなかった。故郷なんて，財産がある連中のもんなのさ。ほかの人間にゃいつも，食いもんがあるとこが故郷なんだ。俺達のような者にゃ，故郷なんか眺めるもんでしかねえのさ。よそ者が眺めるのとおんなじでな。」(101-103)

---

14) 1921年にボーツェンで起きた「血の日曜日」と呼ばれる事件。民族衣装の行列がファシストの集団に襲われ，約50人の死傷者が出た。銃撃から子供を守ろうとした教師フランツ・インナーホーファーが殺害された。なお、本論で「ファシズム」と言った場合、ドイツのナチズムやオーストリア・ファシズムなどは含まない狭い意味で、すなわちイタリア・ファシズムの意味で用いる。Vgl. Rolf Steininger: *Südtirol im 20. Jahrhundert. Vom Leben und Überleben einer Minderheit*, a.a.O., S.52ff.

主人公の父は，グラーツ移住後ナチ党員となり、ドイツ軍の将校としてバルカン戦線でパルチザンを相手に戦い、戦功をあげた。こうした父の経歴や家族の由来を問い，知ることにより，幼い頃の断片的記憶は歴史との係りの中で統合され，主人公は，世界の中での自らの位置を認識するに至るのである。

恋愛における献身と世界への関心

『手を洗うときの幸福』は，「私」の由来や故郷を問い，それらを，断片として浮かび上がってくる幼・少年期の記憶とともに歴史へと関連づけることによって，「私」が世界の中で占めるべき位置を探り，社会的「私」を構築していこうとする青年期の精神的営みを描いている。

こうした営みは当然のことながら，「私」の性的なものとの係りの検証，ヴィタ・セクスアリスとしての側面も持つ。それは，グラーツでの少年期の回想からして既に，叙述の多くを占めている。空襲で焼け出された若い女メアリーは，主人公一家と同じ家に暮らしているが，主人公はある日，この女が寝ている毛布の中に「迷い込む」。(9)女は彼にイギリス兵との経験を語って聞かせる。語り手はまた，防空壕の外に据えられた婦人用トイレを長々と覗いたり，浴場の更衣室で姉の着替えを眺めたりという少年期の思い出や，寄宿学校の休暇中クラスメートの家でその妹の体に触れたり，体というものが罪深いかどうか，自分の妹と触り合って確かめる，という経験を語っている。

性的なものとの係りは，少年期からスイスの寄宿学校に入った当初までは，体への関心の範囲を出ていなかったのに対し，物語の半ばほど，すなわち故郷や歴史を通じて「私」とは何かを問うようになったころから，自分とは別の人格としての異性への関心が表れるようになる。その最初の兆候が，学校で働く料理女や修道女たちへの意識である。(89)それまで主人公は，彼女たちが同じ建物にいることを何とも思わなかったが，急にそれを罪深いものに感じ，同じ空間にいることが許されている事実を不思議に思う。

主人公の性的衝動が社会的なものと結びつくのは，寄宿学校の近くに住む農家の娘ヘレーネへの恋愛によってである。南チロルで夏休みを過ごしていた主人公は，学校の窓から見たヘレーネの姿を夢に見て，不意に思い立って学校に戻る。休暇中で閑散とした学校に戻ると，毎日のように自転車に乗って外の世界へ飛び出していく。畑地でヘレーネ一家の農作業を手伝い，ヘレーネと話し，彼女の前では何かといい印象を与えようと骨を折る。主人公の性的なものとの係りは，身体のみではなく，身体をも含めたヘレーネの「私」への関心に変るのである。

こうして主人公にとって，寄宿学校の中で毎日聴いてきたことのすべてが「よそよそしいもの」(115)となる。担任の神父は，彼が変ったことに気づくが，神父の問いに彼は答えようとしない。彼の反抗心，自我の芽生えは，サッカーをする際の，入学時とは打って変った屈強さにも表れている。今や彼は，誰からも恐れられるディフェンスへと成長した。

主人公の性格的な強さ，自己主張の獲得はしかし，必ずしも彼がいわゆる自我を確立したとか，アイデンティティを構築したということを意味するわけではない。主人公は確かにこの小説の中で成長を遂げているが，この成長は，完了しない成長であり，主人公は「私」を見つけたのではなくむしろ，「私」を巡る問いを見つけたのである。滅私を要求する寄宿学校が逆に，「私」への関心を刺激したとも言える。学校の中で主人公は，外界への関心に，活字への渇望に捉われる。授業の最中，たまらず彼は問いの叫びを上げる。

> 「どうしてここには一つの新聞もないのですか？ 日刊新聞を読んではいけないのですか？」と私は，ドイツ語の時間に質問した。「昨日や一昨日，外の世界では何が起こったのですか？ 僕たちがどこに住んでいるのか，僕にはもう分かりません。」〔中略〕
> ある瞬間から私は落ち着かなくなった。不意に私の頭は問いで一杯になった。私は，こう問うこともできるし，またこう問うこともできるじゃないか，と考えた。自分自身も，またほかの誰一人として，これまで問いの声をあげなかったことを不思議に思った。『キリストにならいて』の言葉を吟じたあと，すぐ叫びたかった。食堂で皆が食事をしている最中に，問いの叫びを上げたかった。どうして神父たちは，彼らが座っているその大きなテーブルから，我々に話をしてはならぬなどと命令できるのか，尋ねたかった。(122)

主人公は「私」について問い，「私」を主張し，世界の中での「私」を見出そうとした結果，放校されることとなる。

「私」の暴露

青年期の主人公と，権威的学校という，青年の自我を打ち砕く抑圧的システムとのあいだの戦いを描いた文学作品は多い。ドイツ文学では，ヘッセの『車輪の下』やムージルの『寄宿生テルレスの惑い』などが特に有名だが，それらとツォーデラーの『手を洗うときの幸福』には，どんな違いがあるのだろうか。ツォーデラーの小説は，青年の成長と挫折という，繰り返し描かれた同じテーマをもう一度繰り返しているに過ぎないのだろうか。[15]

例えば，『車輪の下』と較べてみた場合，物語の設定や大枠において，共通点は少なくない。ヘッセの場合，プロテスタント系の神学校が舞台となっているが，そこでの規則も厳格であり，主人公ハンス・ギーベンラートは学校の課題や規律に絡め取られ，芽

15) 世紀転換期の学校小説・青年期小説に関しては，右記拙著を参照されたい。Atsushi Imai: *Das Bild des ästhetisch-empfindsamen Jugendlichen. Deutsche Schul- und Adoleszenzromane zu Beginn des 20. Jahrhunderts.* Deutscher Universitäts-Verlag, Wiesbaden 2001.

生えつつある青年期の衝動を学校と両立させることができず，放校処分となる。とはいえ，『手を洗うときの幸福』の主人公は，身を持ち崩して死んでしまうハンス・ギーベンラートよりも，反骨精神に富んだ詩人肌の友人ヘルマン・ハイルナーの方により近い。また，世紀転換期に書かれたいわゆる学校小説の多くが，生徒の落第や自殺，すなわち，社会化の失敗を描いており，阻まれた成長をテーマとした反教養小説の側面を持つのに対して，『手を洗うときの幸福』に描かれているのは，一つの発展過程である。主人公の運命が寄宿学校を出たあとどうなるか，それは書かれていないが，学校の門をあとにしたときの彼は，明らかに，ここを初めて通ったときの彼ではない。彼は今までのように「私」を滅して従うのではなく，社会の中に「私」の位置を求めて彷徨うことになるだろう。

ツォーデラーの小説に特徴的なもう一つの点は，歴史との係り，故郷や言語との係りを通じたアイデンティティ探求の物語として，一つの青年期が描かれているということである。世紀転換期に書かれた多くの学校小説においては，主人公の家庭の歴史や民族的帰属性が問題とされることはなかった。せいぜい，トーマス・マンの『ブデンブローク家の人びと』において，市民家庭の4代に渡る精神的深化・審美的洗練の過程が，学校とは折り合いのよくない末裔ハノーに表れたデカダンスの前提となっていたことや，トーニオ・クレーガーが北方的なものと南方的なもののあいだ，ドイツ的なものとイタリア的なもののあいだで葛藤する，といったところに，歴史や帰属性の問題を読み取ることができるくらいである。青年の自己探求を描いたものとしては，ムージルの『テルレス』を挙げることもできるが，寄宿学校の生活，とりわけ屋根裏部屋でのリンチ事件を通してテルレスは，言語や理性の光によっては捉え切ることのできないものを感じ，現象の背後にもう一つのヴィジョンを見る能力を獲得するのであって，それは，思考や言語を超えたところに生まれるインスピレーションや感受性，美的感覚といったものの発見ではあるかもしれないが，歴史や故郷，個別言語と関連づけられたアイデンティティ探求の物語ではない。恐らくプラハのドイツ語系ギムナジウムを舞台にしていると思われるフリードリヒ・トールベルクの学校小説『生徒ゲルバー』(1930)にすら，こうした問題を読み取ることは困難である。これは，当時のエリート教育施設というものがナショナルな枠組みの中で組織され，外国人，あるいは他言語話者が入ってくる環境がなかったためかもしれない。

一方で，『手を洗うときの幸福』に描かれたアイデンティティの問題は，今日あらゆるところに見られるものであり，南チロル人だけが直面する問題ではない。大勢の人々の移住，外国への出稼ぎ，ヨーロッパ統合による国境の形骸化――ナショナルな国家の意味が薄らいでいく現代において，渦中にいる人間は，民族的帰属性，故郷，言語というものと，これまで以上に複雑な関係を強いられている。とりわけそれは，身体的にはもはや子供ではないにもかかわらず，大人としての社会的地位を認められていない青年期には，大きな心理的負担となりうるだろう。そうした問題を，アイデンティティという言葉を一度として使うことなく典型的な形で示しているのが，『手を洗うときの幸福』

である。

主人公の「私」は，寄宿学校時代の様々な想念や体験，幼・少年期の断片的な記憶，両親や祖父母の過去，故郷，性的なものとの係りを，彼が発見した「私」を巡る問いに統合しようと努め，語り手は，青年期に自分が行ったこうした試みを，読者の前に再構築して見せている。こうして架空の読者の前に語り手が「私」の探求をさらけ出すことは，他者に「私」への承認を求める機能を果たす。寄宿学校からは否定され追い出された主人公（語り手）にとって，これは社会的承認の代替である。この小説ではつまり，「私」について物語ること自体が，語り手（主人公）にとっての「私」の探求であり，かつ，他者による承認という意味を持つのである。

ところで，主人公の成長は「私」を巡る問いを発見したところまで描かれていて，問いへの答を出すには至っていない。主人公は今後も「私」について自問し続けるであろう。同じようにまたツォーデラーのその後のテクストも，この問いの更なる追求となっているのである。

Entdeckung der Frage nach dem Ich

—— Über Joseph Zoderer: *Das Glück beim Händewaschen* ——

Atsushi IMAI

Joseph Zoderer gilt heute zweifelsohne als repräsentativer Autor Südtirols. Repräsentativ für Südtirol ist er aber nicht etwa, weil er als „Heimatdichter" die sogenannte Südtirol-Thematik bearbeitet, sondern wegen der literarischen Qualität seiner Texte und des thematischen Gehalts, der über das Spezifische eines Grenzgebiets hinaus an die Problematik des modernen Menschen überhaupt reicht.

Sein Romanerstling *Das Glück beim Händewaschen* (1976) galt seinerzeit als Durchbruch des Autors und fand gute Aufnahme sowohl bei der deutschsprachigen als auch der italienischen Leserschaft. Jedoch scheint er heute, im Gegensatz zum größeren und dauerhaften Erfolg des Romans *Die Walsche* (1982), keine gerechte Achtung zu genießen. Die häufig anzutreffende Lesart von ihm als „Südtirolroman" beleuchtet nur einen Aspekt und läßt möglicherweise sein eigentliches Thema übersehen.

In der vorliegenden Arbeit wurde versucht, diesen Roman als eine Art Entwicklungsgeschichte zu lesen. Im Mittelpunkt der Darstellung steht nämlich die Entwicklung eines Heranwachsenden, die von der anfänglichen Selbstverleugnung über die Suche nach der Heimat hin bis zur Entdeckung der Frage nach dem Ich reicht. Dieser Entwicklungsablauf wird vom Protagonisten selbst aus einer zeitlich distanzierten Sicht erzählt. Der Ich-Erzähler blendet aber auch, ungeachtet der zeitlichen Reihenfolge, hin und wieder weiter zurückliegende Ereignisse ein: Erinnerungen aus seiner Kindheit, die Vergangenheit seiner Eltern und Großeltern sowie die Aussiedlungsgeschichte der Familie. In dieser unkonventionell erzählten Autobiografie rekonstruiert der Ich-Erzähler (d.h. noch nicht der Autor) seinen Versuch im Jugendalter, all diese Vergangenheitsfragmente in das derzeitige Ich-Bewußtsein zu integrieren, um sich in der Welt und der Geschichte zurechtzufinden. Gleichzeitig legt er offen, wie er dazu kam, Fragen zu stellen. Hinter all seinen Fragen steckt die Grundfrage nach dem Ich.

All das besagt aber nicht, daß hier eine Selbstfindung oder Selbstwerdung stattfindet. Die Suche nach dem Ich ist noch lange nicht vollendet, sondern hat eben begonnen. Es ist nicht sein Ich, das hier vom Protagonisten entdeckt wird, sondern vielmehr die Fragestellung, die Suche danach. Der Anlaß dieser Suche ist, daß er sich überall, auch in seiner „Heimat" (Südtirol) fremd fühlt und sich darüber hinaus von sich selbst entfremdet hat. Die Suche führt ihn zum Zweifeln und zur Kritik am „Haus der Regel", der autoritären Institution, die die Schüler zur Abtötung des Selbst

zwingt. In dieser Hinsicht ist der Roman eine Geschichte der Bewußtwerdung.

So tritt er aus der Reihe der spätestens seit Anfang des 20. Jahrhunderts oft geschriebenen Schul- und Adoleszenzromane (z.B. Hesses *Unterm Rad*, Musils *Törless*) hervor. In diesen geht es zwar ebenfalls um die Selbstentdeckung des Jugendlichen. Dies führt aber, anders als bei Zoderer, oft zum Abbruch der Sozialisation. Charakteristisch für Zoderers Roman ist es auch, daß die Suche nach dem Ich mit der Frage nach der Zugehörigkeit, der Heimat, Herkunft und Sprache verbunden ist, und daß hier, ohne daß ein einziges Mal das Wort Identität fällt, der Versuch eines Jugendlichen dargestellt wird, sich eine eigene soziale und psychische Identität zu konstruieren.

Den Lesern wird der Ablauf dieses Versuches vom Protagonisten selbst offengelegt. Dieser Akt der Selbstentblößung bedeutet für den Ich-Erzähler eine soziale Interaktion. Als aus der Schule Entlassener muß er seine Beziehung zur Welt wieder in Ordnung bringen und kommt deshalb nicht umhin, den Gang seiner Bewußtwerdung vorzuführen. Seine Suche nach dem Ich will er von der Welt anerkannt wissen. In diesem Sinne ist das Erzählen selbst ein Teil seines Versuchs, seine Identität nicht nur nach innen zu revidieren, sondern auch den anderen gegenüber festzuhalten.

Joseph Zoderer sagte einmal in einem Interview: „Ich suche das, was ich von mir wissen möchte. Darin sehe ich überhaupt die Notwendigkeit und den Sinn meines Schreibens.“ (Joseph Zoderer im Gespräch mit Samuel Moser, Kulturmagazin, 1983, H.39) Dies ist das Grundthema der Literatur Joseph Zoderers. Dieses Thema, die Frage nach dem Ich, wurde in *Das Glück beim Händewaschen* angeschnitten. So wie der Protagonist nach dem Ende des Romans, also nach der Entlassung aus der Schule, dieser Frage weiter nachgehen wird, dürfte sie auch in späteren Texten das Hauptthema des Autors geblieben sein.